

日々 往来

岡本 敏男



猛暑が遠のき風を爽やかに感じる季節になった。新型コロナの影響

で日々の活動が滞り、時の流れが止まったように錯覚することもあるが、季節の変化は時が着実に前進していることを実感させてくれる。

国内の経済は感染拡大を抑えながら徐々に活動が再開されて

ウィズ・コロナ考

おり、4、5月を底に持ち直し、影響を特に受けやすい社会や経済の動きがみられている。ただし、感染症への警戒感から依然、抑制気味に推移しており、直近の経済見通しでは実質GDPが昨年度の水準に戻るには再来年までかかる見込みだという。

日本銀行は企業金融の円滑化と金融市場の安定のため、3月以降、金融緩和を一段と強化。国、県などの各種支援策や金融機関の積極的な取り組みとも相まって、金融面では緩和的な状態が維持されている。感染症の経済・金融面への影響は、この先もなお不確実性が大きく、必要があれば中央銀行としてあらゆる手段をためらいなく講じていく考えだ。

このような状況下では、まず、影響を特に受けやすい社会や経済の弱い部分に共感し、寛容になることが求められる一方、余力のある者は、環境変化をチャンスと捕らえて積極的に前に進むことが期待される。「新しい日常」における消費行動やサプライチェーンの変化、デジタル社会の加速など、挑むべき課題はわれわれの目の前に次々と姿を現し始めている。

17世紀、英国でペストが大流行した時、学生だったアイザック・ニュートンは、大学が閉鎖されて実家で研究に没頭していた時に「万有引力の法則」の着想を得たという。いつもとは流れの違う今の時間をせめて有意義に過ごしたいものだ。

(日本銀行鳥取事務所長)